俺たちの物語

天照

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺たちの物語

【Ｎコード】
Ｎ９３４８Ｚ

【作者名】
天照

【あらすじ】
黒いドラゴンに村と家族をを奪われてしまった主人公キリヤが旅をして、いろんな仲間を増ながら心も体も強くなり、黒龍に挑む。そんな彼らの物語。魔法あり召喚獣あり武器あり、何でもありのファンタジー。

第1話　始まりの日

「嘘……だろ……」

キリヤは、つい先程まで村“だった”廃墟を前に呆然(ぼうぜん)と立ち尽くしていた。

先程までは確かにこの場所は、キリヤが生まれ育った『アルト村』だった。決して豊かな村ではなかったが、村人は心優しい人ばかりで、とても穏やかな村だった。たとえ小さくても、この村をキリヤは大好きだったし、何よりも誇りだった。

しかし、今はかつての面影もなく見るも無残(むざん)な瓦礫(がれき)くずとなっている。

「なん……なんだよ……」

つい2時間ほど前のことだ。キリヤは母親に夕飯の買出(かいだ)しを頼まれ、徒歩で隣町まで出かけていた。

隣町は村から30分程の場所にあり、道中にモンスターも湧かないため、まだ幼かったキリヤにも夕飯の買出し程度は可能だった。

1時間程度で頼まれた物は全て買い終り、キリヤは家へ帰ろうと道を歩いていた。

その時、ものすごい爆音とともにアルト村の方角から黒い煙が上がった。そして黒い“何か”が漆黒の翼を羽ばたかせ、村から飛び立ち、遥か彼方へと飛翔していった。

（何だあれは……ドラゴン……か？）

キリヤは一度ドラゴンという生物に関する本を読んだことがある。世界最強の生物、本にはそう書かれていた。しかしどれだけ記憶を探っても黒いドラゴンなんてものは一切本には記載されていなかった。

買い物籠を放り投げ、全力で村へ戻っている間にも、キリヤはただひたすらみんなの無事をこと祈るしか出来なかった。

村へ着いた。そこはまるで地獄のようだった。

跡形もなく粉砕された家々。半ばから折られた風車。真っ赤な焦土。そこらじゅうに死体も転がっている。しかもどれも知っている顔ぶればかり。

まだ10年という時間しか生きていないキリヤにとって、このあまりにも突然で絶望的な光景は精神的に耐えられるものではなかった。

キリヤは地面に膝から崩れ落ち、今にも逆流してきてしまいそうな胃物を口をふさいで必死に押さえ込む。

なぜ、一体どうして？　キリヤはこみ上げてくる吐き気を抑えながら考えた。頭に浮かんだのは数分前この村に向かって走っているときに見たあの光景。漆黒の翼を羽ばたかせ、遥か彼方へと消えて行った“あいつ”。可能性としてはそれ以外ありえなかった。

吐き気がおさまると自然と足が動いていた。目で見て分かるものと記憶を頼りに一心に歩き続けた。途中で何度も倒れそうなりながらも、無理やり体を動かした。

そして、ようやく目的の場所に辿り着いた。毎日食べて、寝て、笑った場所。泥だらけになって帰ってきたらいつも叱ってくれた。そして、いつも優しくしてくれた人がいる場所――――我が家に。

だがそれすらも原型を留めてはいなかった。

「父さん……母さん……」

キリヤは朦朧(もうろう)とする意識の中でも信じていた。両親は生きていると。

キリヤはただがむしゃらに、家の一部だった瓦礫を堀り続けた。絶対に生きている。なんとしても見つけ出す。絶対に諦めたくない。キリヤは心の中で何度も自分に言い聞かせた。

作業は1時間以上も続いた。瓦礫は予想以上に多く、常人、ましてや子供が1時間も休まずに続けられる作業ではなかった。だが、キリヤは信じ続けた。掘って掘って掘りまくった。

しかしキリヤもまだ子供なのだ。どれほど意識を強く保とうと体力には限界というものがある。手の肉は裂け、体中の筋肉は既に限界を超えていた。

その時、瓦礫の奥に見えた二つの人影。キリヤは最後の力を振り絞り瓦礫を退(ど)けた。そこには幸せそうな顔をして抱き合っている2人の姿。

2人の安否を確認するためにキリヤは二人の首に手を当てたが――――脈が無かった。

二人は抱き合い、二度と覚めることのない深い眠りについていた。キリヤは安らかに眠る二人の顔をずっと見ていた。いつしか涙も溢れてきた。優しく微笑む2人の顔。それが何度も頭の中に浮かんでくる。

この村はもう戻らない。人の命も、何もかも。何があっても戻って来れない。信じたくないがこれは現実なのだ。

全てを認識した時、キリヤが今まで押さえ込んできた感情が爆発

した。

「うわあああああァァァァァアアアアアアアアア！！」

キリヤは叫んだ。最後まで両親のそばにいられなかった後悔。そんな自分に対する怒り。そして、この村と人の命を破壊した“あいつ”への抑えられない怒り。そのすべての感情を乗せて叫んだ。

意識がだんだん薄れていく。気がついたら倒れていた。

視界がブラックアウトした。

＊　　＊

「うわぁ！」

キリヤはベットから飛び起きた。首は汗でぐっしょり濡れていて、呼吸が荒い。

今の夢を見るのももう何度目だろうか。６年前のあの日から何度も夢に出てくるあの光景。今でも網膜に焼き付いている。

キリヤはふらつく足で窓際に行き、カーテンを開ける。

「――ッ」

真っ暗だった部屋の中に明るい朝の日差しが差し込んできた。

眩(まぶ)しい光だった。これからキリヤが歩む道を照らすには十分に。

第1話　始まりの日（後書き）

すいません。やっぱり1話目は何か暗い感じになっちゃいました。
2話目からはだんだん明るくしていきます。

第2話　命の恩人

キリヤがあの時倒れた後に目覚めた場所は、見知らぬ家のベッドの上だった。

「うぅ……」

まだ激しい頭痛がしていたが、キリヤはまだ鉛のように重いからだを持ち上げた。

「どこ、だ……ここ？」

辺りを見渡すと棚、たんす、キッチンテーブルなどの、ごく普通の家具ばかり。木材で作られている家なので、どこか純和風な雰囲気だった。

まずは、一体ここはどこなのか、誰があの村でキリヤを見つけ、この家まで運んだのか、それを調べなければならなかった。ここでひたすら考えても答えは出そうにない、そう思いベッドから立とうとしたその時、部屋のドアが勢いよく開いた。

そこにいたのは――――なんと筋肉だった。

全長は1メートル90センチほどの巨体。赤い髭（ひげ）と赤い髪。そして盛り上がった筋肉はそこいらのモンスターの比ではなかった。

“筋肉”と目が合った。キリヤは直感的に悟（さと）った。殺される、と。

「おお、目が覚めたか坊主！」

しかし、その“筋肉”が発した言葉は人間のそれとまったく変わ

らないものだった。

「3日も起きないから心配したではないか」

（3日？　俺はそんなに寝てたのか）

ということは3日も寝込んでいる間、この筋肉赤髭達磨（だるま）さんがずっとキリヤの容態を見てくれていたということになる。

「どうだ、具合は？」

「まあ、少しは頭痛がするけど結構良くなりました」

「そうか、それは良かったなぁ」

言葉が通じた。ってことはこれは人間なんだ、と少しだけキリヤは安堵（あんど）する。

とりあえず礼はしなければ、と思いキリヤは頭を下げる。

「あ……あの、ありがとうございました」

するとその男は、顔に笑顔を浮かべ、「いいってことよ」と一言。そして男は椅子に座り、改まったように口を開いた。

「それにしても坊主、あそこで何が起きたんだ？　ちとあそこの村の村長に用事があったんで、隣街まで出かけた帰りに寄ってみりゃあ、ものすごいことになっておったぞ？」

それは今この男が一番疑問に思っていることだろう。キリヤは知っていることを詳しく伝えたかったが、あの村で起こったことを思

い出そうとすると口が思うように動かない。頭痛もひどくなる。
そんなキリヤの様子を見て男は「いや、無理はせんでいいんだぞ」と言ってくれたが、命を助けられたうえに3日も世話になったのだから、キリヤにはすべてをこの男に伝える義務がある。

「いえ、話せます」

キリヤは動かぬ口を必死に動かし、激しい頭痛に必死に耐え、あの村で一体何が起こったのかを全て男に話した。黒いドラゴンがあの村を襲ったこと。最愛の両親を含めた自分以外の全ての村人が殺されたこと。男は途中で口を挟むことなく最後まで黙って話を聞いてくれた。

キリヤは話し終わると激しい頭痛と眩暈（めまい）に耐え切れず、またベッドに横になった。

「そうかぁ、それは辛（つら）かったなぁ」

男はキリヤに同情するかのように呟いた。

「はい、辛かったです。でもいくら悔やんでも仕方ないんです。もう……過ぎた事ですから……」

「そうかぁ、お前は強いなぁ」

「いえ、人間いつか経験することを他人より早く経験しただけですよ」

口ではそう言えても動揺の色は隠せず、キリヤの声は震えていた。
本当にお前は強いな、と男は心の中で呟いた。

しばらく横になっていると頭痛も消え、そういえばこの人の名前知らないなぁと思いキリヤはとりあえず男の名前から聞くことにした。

「俺キリヤって言います。あなたの名前は？」

「俺ぁフィストだ」

フィスト、それがキリヤの命の恩人の名前だった。

「フィストさん、聞きたいことが2つあるんですけど……いいですか？」

「“さん”なんて付けるな。フィストでいい。で、聞きたいことって何だ？」

年上の人呼び捨てで呼んだことねぇよ、などと思いながらキリヤは話を続ける。

「えっと……じゃあ1つ目。ここに一人で住んでるんですか？」

そう、この家は一人で暮らすにしては大きすぎた。明らかに5人以上の家族でも広さには不自由なく暮らせる広さがある。しかし、キリヤはただ興味本位で聞いただけだったが、なぜだかフィストは悲しい顔をしていた。まるで宝物を失くした子供のように。

「まあ、一人暮らしだ」

一言、たった一言しか発していないのにフィストは疲れきった顔

をしている。もうこれ以上は聞いちゃいけない、キリヤは直感的にそう思った。

「じ、じゃあ2つめ……ええっと……なぜ半裸？」

そう、この男は家に帰ってきてからキリヤの話を聞き、現在に至るまでずっと半裸だったのだ。

「なぜって……暑いからに決まっておろうが」

嘘だろ？　今雪降ってるぞ。もしかしてこの人は感覚器官まで筋肉でできてんのか？　と、口には出さないが心の中でツッコミを入れるキリヤ。

「よし、質問は終わったな。俺ぁまたちょっくら隣街まで用事があるんで出かけてくるが、お前は俺が帰ってくるまでは安静にしといた方がいい。そのベッドに横にでもなってろ」

質問する前よりした後のほうが疑問が増えている気がするが、まだこの家にいて良いというのならお言葉に甘えるとしよう。そしてキリヤはもう一度大きく頭を下げた。

「本当に、ありがとうございました」

フィストはこちらに顔を向けず、返事の代わりに手を振って家を出てった。

これがキリヤと、キリヤの命の恩人フィストとの出会いだった。

第2話　命の恩人（後書き）

まだ、書き始めたばっかりです。なので気軽に感想、アドバイスしてくれるとありがたいです。

第3話　入門

「ハァ……ハァ……何でこんなことになんだよ！」

キリヤは森を駆け抜けながら叫んでいた。

キリヤはなぜ走っているのか。それは1時間前のこと。

＊　　＊

キリヤは1週間ほどフィスト宅に居候（いそうろう）状態だった。

ずっと迷惑掛けっぱなしだし、いつかは出て行かなきゃなぁ、とキリヤは思っていた。

そんなある日、キリヤはあることに気づいた。フィストがどこか出掛けて帰ってくる時は、いつも何かでかいモンスターのような物を肩に担いで帰ってくることに。

とりあえずキリヤは疑問に思ったので聞いてみた。

「あの……いつも何かでかいモンスターみたいなの担いでますけど、どこで買ってるんですか？　そんなに大きい物」

するとフィストは平然とした顔で答えた。

「いや、モンスター“みたい”じゃなくて“本物”のモンスターだぞ。それに“買ってる”んじゃねぇ。“狩ってる”んだよ。こいつは今日の夕飯だ」

えええええぇぇぇぇぇ！？　とキリヤは心の中で叫んでしまった。

キリヤは今まで、すぐそこにある街で買ってきてるやつだと思っていたが予想外。この男は狩っていた。

モンスターといえばあの強くて凶暴なやつだ。『出会ったらすぐ逃げろ』が鉄則のモンスターを狩ってきた？　確かにこの世界にはモンスターを狩ることを仕事としている人たちはいるらしい。しかしそんな人たちも大抵（たいてい）は2～5人程度のグループを作って狩りをする。なのに、この男は1人でモンスターを狩って来たのだ。それにこの人さっきなんて言った？　今日の夕飯？　今日の夕飯！？　俺にあのグロテスクなモンスター食わせる気かよ！　ていうかこの人がああいうもん持って帰った日の飯は変な形してなかったか？　てことは何回も俺はあんなグロテスクなもん食ってたのかよ！　でもめっちゃうまかった！　実は見た目によらず料理得意なのかよ！

キリヤは心の中で連続でツッコみまくったキリヤは、心を落ち着かせるために1度大きく深呼吸をした。

「えっと……もしかして……素手で倒したんですか？」

素手で倒したとなればまたツッコまなければならない。

「いや～、さすがの俺でも素手でモンスターは倒せんなぁ」

良かった。

「でも、この武器は使ってるぞ」

「武器？」

フィストが棚（たな）から取り出したのは腕の形をしている金属の腕着装型武器だった。だから要するに……、

「ほとんど素手じゃないですか！」

と、今度は反射的に口に出してツッコんでしまった。
だがフィストは真剣な顔だった。

「あのなぁ坊主、そもそも武器を持ってるってことの意味がどういうことか分かってるか？」

「？　モンスターを倒すため……ですか？」

フィストは大きくため息をついた。

「そうだよなぁ。まだ子供だし知らないのも無理はないか」

とブツブツ言っていたが、改まった顔をしてこっちを見た。
「いいか、坊主」というフィストの先生めいた口調の言葉から話が始まった。

この世界には４種類の人間がいる。
まず１つめが『魔術師（マジシャン）』の称号を持つ人間。読んで字の如（ごと）く魔法使って戦う奴らだ。だが魔法ったって数えきれねえほどあるから他人と同じ魔法は絶対に使えねえ。だから自分が使える魔法は全部自分（オリジナル）だけの魔法だ。魔法を使うにはもちろん魔力は必要だから無限に発動できるモンじゃないが、魔力がないやつだって鍛えれば魔力は生まれる。それに、魔力を持ってるやつも鍛えれば自分の最高魔力量を底上（そこあ）げできる。だがなぁ、次のはそうはいかねえんだ。
２つめが『召喚師（テイマー）』の称号を持つ人間。こいつらは召喚獣を召喚して戦う奴らだ。だが、こいつらは元から持ってる召喚師としての素質でなれるかなれないかが決まっちまうから、鍛えてどうこうって訳にゃあいかん。だから、この世界で一番少ない人種の人間だ。
そして３つめが俺の持ってる『戦士（ブレイカー）』の称号を持つ人間。こいつらは自分だけの武器を使ってモンスターと戦う。もっと言えばほと

んど自分の体を使って戦うから、魔法を使って戦うマジシャンや自分のモンスターを召喚させて戦うテイマー達と比べて、動けるのは当たり前なんだ。まぁ自慢するわけじゃないが俺も中々強いぞ？

んで最後が『民（パル）』。こいつらは何も称号を持ってない人間のことだ。この世界の人口の5割以上の人間がこれだ。まぁ命を懸けてモンスター狩って金稼ぐより、普通に仕事して金稼いだほうがいいって思ってる奴らが大半（たいはん）らしいな。

この世界にはマジシャン、テイマー、ブレイカー、この3つの内2つの称号を持ってる奴らがいる。そいつらを“二重（デュアル）称号”って言うんだがこの世界には十数人しかいないらしい。だがもっと例外な奴らがいてなぁ、3つの称号全てを持ってる奴を“三重（トリプル）称号”って言ってるんだが、まぁこの世界で数人しかいない例外中の例外だ。

というのがこの世界の作りらしい。

キリヤは話を聞き終わった瞬間に身を乗り出した。

「てことは、俺も強くなれるんですか！？」

強くなれれば“あいつ”を倒せるかも知れない。キリヤはそのことで頭がいっぱいだった。

「まぁ、修行したら誰でも強くなれるぞ。多分」

なら修行して誰よりも強くなってやる。そう、“あいつ”よりも。キリヤはフィストの目を真っ向から見た。

「俺は……強くならなくちゃいけない。誰にも負けないくらい。どんな強い奴が来ても、この拳で黙らせてやれるくらい、だから俺を……俺を弟子にしてください！！」

戦い方を教えてくれる人はこの人しかいない。キリヤはそう思い頭を下げた。

一方フィストは――

「ガッハッハッハ！　『強くなりたいから弟子にしてください』か、言いよるのぅ坊主！　そういうやつは嫌いじゃない。俺は弟子は取らない主義なんだが、お前みたいに面白い奴は初めてだ。いいだろう、弟子にしてやる！」

快く承諾（こころよしょうだく）してくれた。

「だがなぁ、俺の修行はちょっとばかしきついぞ？」

「やってやりますよ！」

“あいつ”を倒すためならどんなに辛い修行だって耐えれる。そう思っていた。そう思っていたのだが……。

＊　　＊

現在キリヤは森の中を爆走しながら叫んでいた。

「辛いとは言われたけど……こりゃねえだろ――――――！」

1時間前に始まった修行はこういう内容だった。『この文字が書かれた石を日暮れまでに取って来い。取って来れなかったら今日の夕飯は無しだ！』と言って文字が書かれた石を崖からぶん投げた。どこの仙人の修行だよ！　とキリヤは心の中でツッコんでしまったが、もう今は石を取って来るしかない。

「ああもう、ちくしょ――――――！」

キリヤの叫びが静かな森に響いた。

第3話　入門（後書き）

大体世界観が決まってきました。どんどん細かい設定も増やしていくつもりです。

第４話　修行

「お腹が減りました。ご飯をください、師匠」

「だめだ」

という会話をもう何度繰り返したことだろう。

結果を言うと、石拾いの修行は失敗に終わった。

キリヤは先程の修行で（奇跡的に）石を見つけるところまではいったのだが、崖の下まで石を探しに行っていたので家まで帰ってくる途中に日が暮れてゲームオーバー、という結果に終わった。“全然歯が立たなかった失敗”より“あともう少しだった失敗”になってしまったことが余計に悔しい。

「すごい惜しいところだったんですよ！」

さっきから何度もそう言っているがフィストの答えはいつも、

「失敗は失敗だ。何度言っても飯はやらん。」

と言いながらおいしそうに夕飯を食っている。

まだ１０歳の男の子がこんなに頭下げてご飯をねだってんのに米ひとつくれないなんてあんたは悪魔か！　幼児虐待で訴えてやる！

と犬歯を剥きだしにして睨（にら）みつけても、元からそういう（一方的な）約束だったので米はひとつも出てこない。

結局キリヤは、腹の虫を大音量でならしながらその日を終えた。

修行２日目。

フィスト曰く、これから半年間は体力作りをやるらしい。
キリヤはフィストに連れられ、昨日フィストが石をぶん投げた崖の下に到着した。もうなんだか嫌な予感がするが、まだそうと決まったわけでは無い。自分の師匠を信じろ俺！　きっとそこの川で石拾いだ。
するとフィストがなんか物凄い笑顔でこう言った。

「よし、今からこの崖を登る」

裏切り者めええええぇぇ！　キリヤはまた心の中で叫んだ。
無理に決まっている。崖はどう見ても５０メートル以上ある。そこを命綱無しで登れと？
そんなキリヤの不安そうな顔を見てフィストは、

「大丈夫だ。俺も登るから」

そういう意味じゃねえよ！　何もかもが根本的に間違ってんだよ筋肉マン！
心の声すらも嗄(か)れそうになりながらキリヤは叫んだ。

「よーし、登るぞー」

未だに心の中で葛藤(かっとう)中のキリヤを無視して、フィストは崖を登り始めてしまった。
いいよ、やってやる。絶対登りきってやる。
そう覚悟を決めたキリヤであった。

２０分後

死ぬ！　もうホントに死ぬ！　嫌だ、帰りたい！　でも帰れない

！　怖い！　お父さん、お母さん、もうすぐそっちに行くかも知れません。

キリヤは命懸けで６割程度登っていた。

「お～い、まだか～」

一方フィストはもう登りきっていた。

「師匠！　助けてください！　俺死んじゃいます！」

「大丈夫だー、登れるって思ったら登れるぞー」

あんたの根性論なんか聞いちゃいないんだよ！

キリヤはこんな状態でもツッコミつつ、必死に足を動かした。

４０分後

「ハァ……ハァ……死ぬ……かと思った……」

キリヤは死ぬ気で足を動かした結果登りきっていた。

「やるじゃないか、坊主」

「はい……体力には……自身が……ありますから……」

キリヤはかなり息を切らしているのに、フィストは平然としていた。人間かどうかが怪しくなるほどに。

「疲れたか？」

「はい」

「休んでくか？」

「もちろんです」

というわけで1時間ほど休憩を取り2人で家に帰宅した。もちろん今日は夕飯を食った。

それから約3ヶ月間。はっきり言って毎日が地獄だった。

命を掛けるほどの修行内容ばかりだったが、キリヤは走り登り叫び、師匠のサディスティックな修行を耐え抜いた。結果、今では大抵の修行はこなせるようになったキリヤだった。

そんなある日。またしても師匠による無茶な言動から地獄の日々が始まることになった。

それはいつも通りの朝飯の時間のことだった。

「なぁ坊主、最近は何やってもできるようになったんじゃないか？」

「そうですか？　まあなんとなく前と比べてできるようになった気はしますけど……」

「んじゃ、いっちょステップアップしてみっか」

「へ？」

だらしない声を出したキリヤにフィストはとんでもないことを告げた。

「今日からメニューに『モンスター狩り』を入れる」

「は？」

というわけで今日から（ほとんど強制的に）『モンスター狩り』をすることになった。

朝食が終わると森へ出た。そう、何も持たずに……。

「って武器無しですか！？」

「何言ってんだ。お前武器持ってないだろ？」

「じゃあ武器買ってくださいよ」

フィストは鼻で笑ってこう言った。

「金がない」

「……。」

長い沈黙。

そうか、お金がなかったのか。知らなかった。とりあえず謝ろう。

「いや……あの……なんかすいません」

「構わん。別に稼ごうと思えばいくらでも稼げるからな」

「？　じゃあなんで稼がないんですか？」

フィストは大きく息を吸い、

「めんどくさい！」

などと抜かしやがった。

金を稼ぐのがめんどくさいってどういうこと？

「……そっすか。じゃあもう修行やっちゃいましょう」

キリヤは半(なか)ば投げやりになってそう言った。

「よし。じゃあ修行の内容を説明する。まず最初お前にはものすっごい弱いモンスターと戦ってもらう。まあ素手だしな。そして万が一の時に備えて俺も近くにはいるが、基本手は出さん。本当に危なくなったときにだけしか助けには入らない事を覚えておけ。説明終わり！　何か質問は？」

「無茶です！」

「やればできる！　さあ来い！」

キリヤはフィストに服の襟元(えりもと)を掴(つか)まれ森の奥へ引きずられて行った。

キリヤが連れて来られた場所は森の中の、半径５０メートル程の空間がある場所だった。

そこには、体長が１メートル８０センチ程で二足歩行のトカゲのような、いわゆる『リザード』と呼ばれるモンスターが１匹いた。

まだこちらには気付いてない様子だった。

「今からお前にはあいつを倒してもらう。あの『リザードマン』はリザードの中でも弱っちい方だが、お前の歳で素手で倒すとなると結構厄介なやつだ。奴は今ここで役立つスキルは持ってないが、油断したら……死ぬからな」

「何で戦闘直前にそんな怖い事言うんですか」

キリヤは横目でフィストを睨んだ。

「まあ、要するにがんばれって事だ！　ガッハッハッハッハ！」

すると今までこちらに気づかなかったリザードマンが、フィストの笑い声でこちらに気付いてしまった。リザードマンは敵意剥き出しに喉を鳴らしながら物凄い戦闘態勢でこちらに襲い掛かってきた。

「さあ行って来い、坊主！」

キリヤは背中を押されて、木が生い茂った森の中から飛び出した。

やってやる、やってやるよ！

背中を押された勢いからさらに加速し、キリヤは目の前の敵に向かって全力でダッシュした。

キリヤは相手に近づくにつれて、自分と相手の身長差を実感していた。相手が１メートル８０センチ程で大人と同じような身長でも、まだ身長が１メートル５０センチ程のキリヤにとっては“巨大”だった。だが逆に言えば、その分キリヤは小回りがきくということになる。それを利用すれば勝てない相手ではない。キリヤは姿勢を低くし、猛然と走った。

「オラァッ！！」

先手はキリヤだった。
最高速度のまま、キリヤはリザードマンの顔面にドロップキックをお見舞いした。それを受けたリザードマンは、後方に3メートル以上吹っ飛ぶ。
吹っ飛ばされたリザードマンは驚いたことだろう。自分より小さな相手に顔を蹴られたのだ。驚かない筈(はず)が無い。だが一番驚いていたのはキリヤだった。あの巨体が、たかが身長1メートル50センチ、たかが体重40キロ前後の自分の蹴りで3メートル以上も吹っ飛んだのだ。これで驚くなと言う方が無理だ。
あの命懸けの修行により、キリヤの腕力、脚力、瞬発力、精神力が本人の気付かないうちにとてつもなく上がっていたのだ。

（よし、いける！）

キリヤは追い討ちをかけるように走り出し、起き上がった直後のリザードマンの顎(あご)に勢いよくアッパーを決めた。
それを喰らったリザードマンは目に見えて分かるほどブチ切れていた。リザードマンは猛獣のような叫びを上げながら全力でキリヤに突っ込んできた。

「ウオラッ！」

しかし、キリヤは殴りかかってきたリザードマンの腕をつかみ取り、その勢いを利用して背負い投げの要領(ようりょう)で後方に巨体を投げ飛ばした。
後方に飛んでいったリザードマンは背中から地面に叩きつけられた。

（もう少し、もう少しで勝てる！）

キリヤが最後の技を決めようと思ったその時。リザードマンが逃げるように走り去っていった。

「……え？」

不思議だった。モンスターというのは普通、倒すか倒されるかするまで戦いはやめないものなのだが、明らかに今リザードマンは逃げている。

結局俺の勝ちって事でいいのかな？　と思いキリヤはフィストの方を見た。するとフィストも不思議そうな顔をしていた。

しかしキリヤがフィストの元へ戻ろうとした直後、フィストの表情が凍りついた。

フィストはキリヤの方、正確に言えば、キリヤの後ろからアックス片手にキリヤに向かって走ってくるリザードマンを見て驚いていた。

「逃げろ！　坊主！」

フィストの焦りの表情は初めて見る。

キリヤも、アックス片手に走って来るリザードマンを見た瞬間は驚いたが、すぐに戦闘態勢に入る。

「大丈夫です！　さっきは一発もあいつの攻撃受けてません！　このまま倒します！」

「違う坊主！　そいつの武器が危険なんじゃねえ！　そいつ自身が危険なんだ！」

フィストが何を言っているのかキリヤには分からなかった。さっきまであんなに有利だったのに。

「どういうことですか！？」

キリヤは全力で走って来るリザードマンから目を離さずにフィストに聞いた。

「そいつのスキルは『スラッシュ』っつって、武器を持つと戦闘力が馬鹿にならないほど高くなるんだ！」

（嘘だろ、そんな事聞いてねえよ！）

このままじゃやばい、そう思ったキリヤは一旦距離を取ろうとしたが、リザードマンはスキル『スラッシュ』により脚力が異常に上がっているため、もうキリヤの目の前まで迫っていた。

（もうやるしかない！）

ここまで近づかれたらもう逃げられない。キリヤはもう一度戦闘態勢に入った。戦闘力が上がったとしてもさっきと同じリザードマンだ。勝てない道理が無い。

リザードマンはアックスを大きく振りかぶった。その瞬間キリヤは野生の勘というものなのか、反射的に頭を下げていた。上を向くと、なんと既にリザードマンはアックスを振り終わり、次の攻撃の態勢に入っていた。

（何だこいつ！？……速すぎる）

リザードマンは脚力だけでなく、その他全てのパラメータが異常

に上がっていた。
今の攻撃は偶然避けられたが、次は絶対に当たる。それはもう今の攻撃で分かったので、確実だった。
（だめだ……負ける……）
圧倒的な戦力の差を前に、キリヤは恐怖で体が動かなくなっていた。その間にも着実とアックスが顔に迫ってくる。
（俺はここで死ぬのか？　こんなところで？）
キリヤはほとんど諦めてしまっていた。こいつには絶対に勝てない、そう思ってしまっていた。
頭に浮かんできたのは父と母の顔。キリヤに向かってやさしく微笑んでいる。
（死んだら……父さんと母さんに謝りに行こう……）
刻一刻と迫るカウントダウンの中でキリヤは考えていた。そして気付く。
（でも死んだら、なんて謝ればいい？　『最後は諦めて死んじゃいました』？　そんなふざけた事言えない。言える訳が無い）
キリヤの右手の甲が淡く赤く光り始めた。
（そうだ、そうじゃないか。俺は“あいつ”を倒すまで死なないって心に誓ったじゃないか。こんなところで俺が死んだら父さんと母さんはきっと悲しむ。2人のそんな顔は見たくない。絶対に見たくない。生きてたって死んでたって関係無い。たとえ天国にいたっ

て、２人には――ずっと笑っていて欲しいんだ！！）

キリヤの右手が太陽のように激しく光り輝いた。

キリヤは顔の目の前まで迫っていたアックスに、輝く右手でアッパーを決めて粉砕した。

リザードマンは驚く表情を見せながらよろめいている。

「俺は……」

キリヤはすぐさま右手を後方に振り絞る。

「お前みたいな“雑魚”に……」

右手がさらに輝いた。

「負けらんねえんだ！！」

キリヤの右ストレートはリザードマンの腹の中心を打ち抜いた。

リザードマンは宙を舞い、ドサリ、と地面に落ちた。そしてそれっきり動かなくなった。

「勝った……勝ったぞ……うおっしゃ――――ッ！」

キリヤは歓喜の雄たけびを上げた。

「おい……お前まさか……」

フィストは目を丸くしていた。

「師匠！　やりました！　勝ちましたよ！」

「おい坊主、ちょっと右手見せてみろ」

「？　いいですけど……」

キリヤは右手を見せた。先程は無我夢中だったので気付かなかったが、手の甲には赤く光る紋章が刻まれていた。

「なんですかこれ！？」

「坊主、よく聞けよ。こいつはなぁ……」

フィストは、はっきりとした声でこう言った。

「『戦士（ブレイカー）』の称号だ」

「ウソォォォォォォォォ！？」

キリヤはあまりの衝撃に叫んでしまった。

「嘘じゃねえよ。これを見ろ」

そう言ってフィストは右手の手袋を外した。なんとそこには、今キリヤの右手にある紋章とまったく同じものがあった。

「俺がこの称号を手に入れたのは１８歳の頃だ。当時は俺が最年少の『戦士（ブレイカー）』保持者だったんだが……お前に越されちまったな」

うまくは言えないがキリヤは物凄くうれしかった。これでもっと

強くなれた。そう思えたから。

「これが俺の称号……」

キリヤは右手の甲を見ながら呟いた。

「じゃあ俺、師匠より強くなれましたか？」

冗談半分で言った言葉だが、キリヤは殴り飛ばされた。

その後少しの休憩を取った。

「よし、そろそろ帰るか」

「はい！」

そういうわけで家に帰ることになった。

（それにしても、『スラッシュ』が発動したリザードマンを“雑魚”とはなぁ……）

フィストは、なんだか今はテンションが高めなキリヤの背中を見ながら心の中で呟いた。

（正直、俺も素手じゃあ、あれにゃ勝てんわ）

第４話　修行（後書き）

長くなってすいませんでした。書きたいことがたくさんあったので
ついうっかり。次はちょっと短めになります。

第5話　俺の相棒

始めは弱いモンスターとの対戦ですら苦戦していたキリヤだが、師匠のステキ案により、そりゃあもう森の中でも最強クラスのモンスターと戦わされた。『負けたら今日の夕飯なしルール』により引くにも引けない状況の中、引かなかったらモンスターにぶっ飛ばされるという最悪のシチュエーション。もう何がなんだか分からないまま戦ったキリヤ。そんなことをしている内に、不思議とモンスターの弱点なども分かるようになった。

今ではこの森で最強クラスの『デーモン系』や『パラサイト系』のモンスターも難なく素手で倒せるようになった。

あまりの成長の早さにフィストは驚いていた。一度二人で組み手をやったが、もちろんキリヤがフィストに勝てるはずもなく結果は惨敗。フィスト曰く「まあ、修行が足りんってことだな！　ガッハッハッハッ！」などと言っていたが、はっきり言ってフィストに勝てたらそいつは既にモンスターだ。

そして3ヶ月が経った。

ある日の朝。いつも通り食卓で朝飯を食べているキリヤに、フィストは言う。

「おい坊主、そろそろお前の武器でも買いに行ってみるか？」

「え？　いいんですか？」

「お前も一応ブレイカーだからなぁ。武器を持ってなきゃあブレイカーとは名乗れんし」

「一応って何ですか。一応って」

「だから今から準備しろ。今日隣街まで武器買いに行くぞ」

キリヤの言葉は華麗にスルーされ、今日は武器を買いに行くことになった。

実はキリヤは内心めちゃくちゃワクワクしている。武器というのはブレイカーの証。改めて自分がそんなに成長していることを実感していた。

とりあえず隣街『アリエスタ』まで来たキリヤたちは、武器屋に向かった。

武器屋に着くと、フィストは「俺ぁちょっと用事があるから、この金使って好きなもん買えや」と言ってキリヤに金を渡すと、どこかへ行ってしまった。とりあえず何か買おう、と思いキリヤは武器屋の中に入る。

武器屋の中は結構広いスペースがある。しかし、そのほとんどを埋め尽くす程の武器の量。

「こんなかから選ぶの？　どう考えても多いだろ……」

物にさえツッコむことが出来るようになったキリヤ。

とりあえずはどんな武器があるのか見て回ろうと歩き出す。

大剣、双剣、槍、太刀、ハンマー、日本刀、片手剣、鎌、銃剣、杖、弓ｅｔｃ

「多すぎる……」

店内を1周するのに３０分掛けたが、多すぎる武器の量に目を回して挙句（あげく）の果てには気持ち悪くなってしまう始末。ここで世界初『

武器酔い』というものが誕生した。

「お客様？　大丈夫でしょうか？」

武器酔いにより膝を崩し両手を地面に着いているという、なんとも情けないキリヤの様子を確認しようと、武器屋の店員が話しかけてくる。

「いや……あの……その……えっと……」

「お客様？」

「ええい！　これ下さい！」

キリヤは物も見ず、壁に立て掛けてある黒い“何か”を掴み、店員に突き出す。

「は……はい」

店員は驚きながらも決算を済ませた。

“何か”を渡された瞬間キリヤは店の外に突っ走って行った。

「ぷはぁっ！」

肺に溜まっていた空気を口から吐き出す。

こんな事が起こってしまったのはキリヤの性格の問題だった。

実はキリヤは極度の人見知りなのだ。通常の人見知りというのは、知らない人と会った時に、他人以上に恥ずかしがったり嫌がったりすることである。だがキリヤの人見知りは他人のそれと比べて激しすぎた。もちろん誰とも話せない訳ではないが、先程のようにいきなり知らない人に話しかけられてしまっては息が詰まってしまうほ

ど致命的なのだ。結果、先程店員にいきなり話しかけられたキリヤは焦りのあまり、ちらっと目に映った“何か”を反射的に買って店から逃げて来たのだ。じゃあ何故フィストと出会った時は平気だったのか。それは、あの人は見た目が人でも中身がモンスターだから“人”見知りは利かない、そういうキリヤの解釈だった。

「はぁ……いつ直るんだろう、これ」

自分が人見知りだと分かっていてもどうやって直すかが分からない。そんな状況が何年も続いている。

「あ、そういやぁ俺何買ったっけ」

今更ながら自分が買った物を確認するキリヤ。

「何これカッコイイ！」

それは漆黒のように黒く光る太刀だった。全長はキリヤの身長程もある。刀身も柄の部分も全て真っ黒。そして柄の部分に札のようなものが付いていた。

「『霧影（きりかげ）』？　あぁ、こいつの固有名か」

それがキリヤの武器の名前。

「これからよろしくな、相棒」

柄の部分と熱く握手を交わしたキリヤは、その後フィストと合流してウキウキ気分で家に帰った。

フィスト曰く「太刀の扱いは難しい」らしいのだが、そんなこと

は関係ない。こいつは俺の相棒だ。たとえちょっとした弾みで買ってしまった刀でも、キリヤは“偶然”なんてもんじゃなく何か“運命”を感じていた。

そして次の日からは武器を使った修行が始まった。最初はフィストから太刀の説明を受けた。

太刀のメリットは刀身が長いため刃の届く範囲が大きく、中距離戦に優れているということ。逆にデメリットは敵に近すぎると満足に刀を振れないこと。かなり重いので扱いが難しいことなどだった。前者はどれだけ努力しても変えようのない事実だったが、後者なら体を鍛えればどうにかなる。そしてキリヤは既にその筋力を、フィストとの修行により手に入れている。それを全て理解した上での修行が始まった。

始めの1ヶ月は太刀の感覚を体に染み込ませる為に、ただひたすら刀を振り続けた。頭の上から目の前に振り下ろす。そしてもう一度頭の上に刀を持ち上げ、振り下ろす。その作業の繰り返し。何度も振っていると手の皮は剥け、肉刺(まめ)もできた。しかし、何度も手の皮が剥けている内に皮膚が硬くなり、傷はできなくなった。

太刀が体に馴染んだら、技を磨き、それを反復、応用。抜刀、峰(みね)打ち、突き、なぎ払い、数多(あまた)の技を教わった。

それをマスターした後は、モンスターとの戦闘。この森の最強クラスのモンスターを、素手で倒せるキリヤにとって、武器を使ったモンスター狩りは朝飯前だった。

いくつもの事をフィストに教わり、そして半年が経った。今ではキリヤは立派な『戦士(ブレイカー)』になっていた。

第5話　俺の相棒（後書き）

短めだったのですぐ書き終わりました。やっと武器ゲットです。これからどんどん強くなっていきます。

第6話　ゴブリン退治

半年間の太刀修行の末、キリヤは立派な『戦士（ブレイカー）』になっていた。
今では太刀を自分の体の一部の様に動かせる。背中の鞘（さや）に入っている相棒とは息がぴったりだ。
自分では強くなったと思っているが、フィストには何度やっても勝てなかった。一度あと一歩のところまでいったのだが、真剣白刃取（はど）りという現実離れした技を決められてあえなく敗北。それからは一度も勝っていない。

ひたすら修行に没頭し続けたキリヤは、ずっと世話になったフィスト宅を出て行くことにした。1年間迷惑を掛けっぱなしで面倒を見てくれたフィストには何度も礼を言った。いつでも帰ってきていいからな、と言われたのが親子離れみたいで嬉しかったし少し淋（さび）しかった。

そして現在。フィストと別れたキリヤは隣街『アリエスタ』へ向かって移動中。

「辛かったな～。でも楽しかったな～」

独り言を言いながら歩いているとアリエスタに着いた。これでここに来るのは2回目だが何度来ても人が多い。そして広い。

（よし、まずは金が必要だ）

これからこの街で生活していくにはお金は欠かせない。宿を借りるにも食料を買うにもお金は必要だ。

（どこ行きゃいっかなぁ）

何か儲かる仕事を見つけようとぶらぶらしていると『アリエスタ集会所』という場所に着いた。もしかしたら集会所に依頼掲示板があるかもしれないと思いキリヤは集会所に入る。

中は意外と狭く、食事用テーブルが４つ程と掲示板、依頼受け付けのみというシンプルな場所だった。

キリヤは掲示板を見る。そこにはモンスター狩りの依頼が山ほどあった。とりあえず一番報酬額が高い依頼を選び、依頼用紙を受付へ持って行く。しかし、受付係りの小太りのおじさんは小難しそうな顔をした。

「坊や、これは遊びじゃないんだよ？　子供がモンスターなんてもんと関わっちゃだめだ。もう帰りなさい」

「え？　いや……でも……」

「たとえふざけてるんだとしても背中にそんなオモチャ着けていたら親御（おやご）さんが悲しむよ？　さあ、帰った帰った」

相棒をオモチャ扱いされた挙句（あげく）、集会所から追い出されてしまった。

キリヤはむかっ腹を立てたが、それは当たり前といえば当たり前なのかもしれない。キリヤと同じ年頃の子供は外で元気良く遊ぶのが普通なのだろう。モンスターなんてものと関わるのは遠い未来の話。大人になるまでは街の中で安全に暮らす。街の外には絶対出ない。そんなルールの下で周りの子供は生きている。いや、大人もそうだ。だが他の人と違い、今までモンスターという生物と関わりすぎたキリヤにとってそんな生活のほうが珍しいと思えた。というより馬鹿げている。なぜそんな家畜のような生活に耐えられるのか？

こんなにも世界が広いのだから危険を承知でも外の世界に出たいという奴はいないのか？　キリヤは昔からその事を疑問に思っていた。

（とりあえず今はなんとしても金を稼がなければ）

しかしまた集会所に入っても追い出されるだけなので、どうしようか迷っているとふと右手の紋章のことが頭に浮かぶ。確かこれはブレイカーの証。この紋章を持つ物は強い。ならばこの紋章を見せたらどうなるか。フィストには、面倒なことになるので極力他人には見せるなと言われているが、背に腹はかえられない。

「よし」

キリヤはもう一度集会所に入った。そして受付まで小走りで近づく。それを見てまた小太りの受付係りは何か言おうとしたが、キリヤが先に口を開いた。

「子供に仕事をしちゃいけないという決まりはありません」

そう言ってキリヤは右手の皮手袋を取り、ブレイカーの称号を見せつけた。

「なっ――――」

小太りの受付係りは目を丸くして驚いていた。確かに驚くことだろう。フィストからはキリヤが最年少戦士（ブレイカー）所持者と言われた。ならば驚かない筈が無い。

「これで分かってくれました？」

するとどういう事だろう。なんと頭まで下げて依頼を受けさせてくれた。

（便利だなぁ、これ）

キリヤは準備が整い次第、すぐに出発した。

依頼の内容はもちろんモンスター退治。ターゲットはゴブリン系モンスター。固有名は『パワーゴブリン』。名前の通り、力が馬鹿にならないほど強い。しかしその反面動きは鈍い。特徴は大きな棍棒と赤い体。

依頼用紙に書かれている情報を頭にインプットし、キリヤは今街から出てすぐの広い草原を疾走している。

（そういえば森のモンスターとしか戦ったこと無いからワクワクするな～）

などと呑気（のんき）な事を考えていると、小高い丘の上にターゲットを発見した。大きな棍棒に赤い体、角が生えていて盛り上がった筋肉に鋭い目つき。体長はキリヤよりやや高めのパワーゴブリンがそこにいる。

（よし、戦闘開始！）

『霧影（きりかげ）』の柄の部分を掴み、キリヤは戦闘態勢に入った。

あと２０メートルというところでキリヤもまた気付かれた。

そこでキリヤはふと思う。パワーゴブリンは力が強い、それは依頼用紙に書いてあったし小太りの受付係りからも聞いた。いやしかし、だがしかし――――一体どれほど強いのか。

キリヤの素早さなら攻撃を避けてカウンターを狙えば難なく勝て

るだろう。だがキリヤは知りたかった。どちらの力が強いのかを。フィストから学んだことは“習うより戦え”だった。ならば実戦で相手の力の強さを学ぼう。

というわけでキリヤは真っ向からパワーゴブリンに突っ込んだ。

「うおら――――！」

ガンッ、という音と共に太刀と棍棒が交わった。そしてそのまま鍔迫(つばぜ)り合い。

さすがはパワー系と言うべきか。力が今まで戦ったことがあるモンスターと比べて半端なく強い。

「――――クッ」

強い、強すぎる。押されている。圧倒的に力負けしている。

そう、だからこそ――――俄然(がぜん)燃えてきた。

森でモンスターと戦っている時もこんな事があった。負けそうになると逆に気合が入ってしまう。これは一体キリヤの性質なのか、それともブレイカーの称号を持つ者共通の性質なのか。

なんだか妙に燃えているキリヤは笑ってしまった。胸の高鳴りが激しくなる。

「強えーなぁ、お前――――けどっ！」

キリヤは足を踏ん張り、太刀を握っている手に渾身(こんしん)の力を込めた。

「まだ師匠の方が強えぇ！」

キリヤはパワーゴブリンを棍棒ごと叩き斬った。がぁぁぁぁという声を出したゴブリンが緑のカーペットに倒れた。

「よっしゃ！　俺の勝ちだな！」

キリヤは最後に右手でガッツポーズを決めた。

倒したパワーゴブリンは集会所に持って行って報酬をもらった。周りの大人も受付係りのオッチャンも目が飛び出るほど驚いていたが、このくらいのモンスター退治はキリヤにとって朝飯前だ。まあ、少しばかり苦戦はしたが。

とりあえずキリヤは報酬の金で宿を借り、食料を買った。

「よし、とりあえずこれで全部ＯＫだな」

この日から１１歳のキリヤの一人暮らしが始まった。

第６話　ゴブリン退治（後書き）

１１歳で一人暮らし始めちゃいましたよ。早いですよ。

第7話　師匠（仮）

キリヤは１６歳になった。顔立ちには幼さが無くなり身長も伸びて、もうほとんど大人になっていた。
５年間の生活は大して辛(つら)いものではなかった。毎日のようにモンスター退治の依頼を受けて金を稼ぎ体を鍛えた。まあ逆に言えば少し物足りなかったが。

「おはようオッチャン、今日これやるよ」

「はいよ！　おお5体連続かい、気をつけなさいよ。それにしてもキリヤ君、大きくなったねぇ」

「まあ、あの時からもう5年も経ちましたから」

「懐かしいねぇ。確かあの時、わしが最初キリヤ君のこと追い出したんだよね？」

「結構ショックでしたよ」

「ハッハッハ、すまんねぇ。ホントにあの時はふざけてるのかと思ったんだよ。けどまさかあの歳で『戦士(ブレイカー)』だったとはねぇ。わしゃあ驚いたよ」

「ブレイカーになるまでが辛かったんですけどね……思い出したくない。じゃあそろそろ行きます」

「おう、行ってらっしゃい！」

この5年間であの受付係りのオッチャンとは仲良くなった。最初のほうはずっと敬語使われててちょっと変な感じだったけど、何年も依頼をやっている内に普通に話してくれるようになった。

現在キリヤは5体連続のモンスター退治の依頼を受けている。今突っ走っている草原から見える丘の上にターゲットがいる。そのモンスターというのが……。

「お前らも懐かしいな。5年ぶりか？」

キリヤは5体のターゲットに一斉に睨まれた。真っ赤な体に馬鹿でかい棍棒、角を生やしていて鋭い目つき――――パワーゴブリン（×5）

パワーゴブリンたちはキリヤを見つけると同時に一斉に襲い掛かってきた。

「おいおい、感動の再会なんだから少しくらい雑談でもしようぜ。ま、お前らは俺と初対面か」

そう言いながらキリヤは背中の相棒『霧影（きりかげ）』を腰の位置まで持ってくる。侍のように刀を構え腰を低くし太刀の柄の部分に手を掛ける。

「「「「「「ガアアアアアアアアアア！」」」」」」

ゴブリンたちがキリヤに攻撃しようと一斉に棍棒を振り上げた。

「――――フッ」

それを狙っていたかのようにキリヤは浅い息遣いと共に太刀を鞘

から引き抜く。霧影の刀身の長さがあればゴブリンを5体同時に斬ることは十分だった。斬り終えた頃には既に刀身は鞘の中。カチンという音と共に刀身全てを鞘に入れた瞬間、ゴブリンたちの体が全て真っ二つに裂けた。

居合い斬り――――腰の扱いですばやく刀を抜き放ち、わが身を守り敵を制する操刀の術。これもフィストから教わった太刀技の内の1つ。一般的に太刀では居合い斬りは使わないが、フィスト曰く「出来る方が便利だしカッコイイ」らしい。

「さてと……」

倒したのはいいが、報酬をもらうにはこれを集会所まで持って行かなければならない。ただでさえ1体が重いのに5体もいたら相当骨が折れる作業になる。しかも居合い斬りで5体のゴブリンを全て真っ二つにしてしまったため合計10パーツを集会所まで持って行かなければならない。街までの距離は1キロ弱。

「はぁ……」

もうため息を吐くしかなっかた。

結局キリヤが全ての作業を終えた頃には午後3時をまわっていた。最初にゴブリンの5パーツを集会所まで持って行き、もう一度狩場まで戻って5パーツを集会所に持って行った。居合い斬りなんてした自分が馬鹿みたいだった。しかし5体連続退治だったため報酬はかなり高かった。精神的にも肉体的にも疲労したキリヤにとってそれが今日の唯一の支えだった。

キリヤは宿への帰り道、必要な食料を買って帰った。宿の大家さんに家賃も払った。それなのにまだ今日の報酬は半分も減らない。そう、これがキリヤがモンスター退治を続ける1つの理由でもある。

モンスター退治の依頼は他の依頼と比べて断然危険だが、その分報酬が高い。しかも今日の依頼は5体連続退治だったので報酬の額の0の多さにビビッてしまった。余った報酬の金はどうするかというと、自分の好きな物をひたすら買いまくる――――のではなくちゃんと貯金している。それはある目的のために必要だからだ。ある目的と言っても簡単に言えば旅に出たいということだ。この街を出て外の世界のいろんなものを見てみたい、まだ見ぬこの世界の裏側へと行ってみたい、そして何より“あいつ”に会うためにはこんなところでじっとなんかしていられない。もう既に旅に出るための金は、5年間集め続けたから十分に集まっている。

翌日

キリヤは1週間後に旅に出ようと決めた。今日はそのために必要な物を買いに行くことにした。朝食を食べ、金を持ち、宿を出た。

（何から買おうかなぁ）

旅に必要な物と言っても具体的に何を買えばいいか分からないキリヤは現在いろんな店が立ち並ぶ商店街を歩いている。

（武器はあるし……まずは防具かな？）

というわけでキリヤはまず防具屋に行った。

5年間この街で生活しているキリヤは前々からあることを疑問に思っている。この街には戦闘職の人が少なすぎる。街中を歩いていても武器を持っている人も防具を着けている人もまったくと言っていいほどいないのだ。そのため武器屋、防具屋はいつも過疎状態。なのに妙に品揃えが良い。何故だろう。そんなことを考えながらキリヤは防具屋の中に入った。

「――――！」

その瞬間店の中にいる店員が全員キリヤのほうを振り向いた。防具屋の中にはキリヤの他には客が一人もいなかった。そして店の中にいる店員みんなが驚いた顔でずっとこっちを見ている。

「あの……」

とりあえず近くにいる若い男の店員に話しかけてみた。キリヤは5年前より人見知りはしなくなったが、まだ完全に治ったとは言い難い。

「は、はい！」

話しかけた店員はなぜか物凄い緊張しているようだった。まるでキリヤが初めて右手を見せた時の受付係りのオッチャンの様に。

「あの……なんでそんなに驚いてるんですか？」

気になったから聞いてみた。

「な、何でって……あなたブレイカーのキリヤさんですよね？」

「な、なぜそれを！？」

キリヤはフィストとの約束を守り、今の今まで誰にも自分がブレイカーだとは言ったことが無い筈なのに何故この店員はそれを知っているのか。いや待て……誰にも言った事が無い？

「『アリエスタ集会所』依頼受付係りのグランさんからそう伺っているのですが……」

（オッチャ――――ン！）

キリヤは心の中で遠く離れたアリエスタ集会所依頼受付係りに叫んだ。だが声はもちろん届かない。

「……はい、そうです。キリヤです」

キリヤはがっくりとうなだれた。

「じゃあ、ブレイカーって事は右手に紋章があるんですか？」

「……はい、ありますけど……」

【店員は紋章を見たいという目でこちらを見ている。見せますか？】

1．見せる
2．見せない
3．逃げる

店員はキラキラという効果音が聞こえてきそうな目でずっとこちらを見ている。さすがにここは断れない。ていうかもうばれてる。

「分かりました」

キリヤは1を選んだ。右手の皮手袋を外し、店員に見せた。その瞬間この店の店員という名のギャラリーたちがぞろぞろとキリヤの周りに集まってきた。

おおおおおお、という店員たちの歓声。
すげ～初めて見る、カッコイイ、触りたい、俺も、私も、ということになり、キリヤの右手がいろんな所へ移動する。
全員が気の済むまで右手を見せたキリヤは疑問に思った。

「ブレイカーってそんなに珍しいんですか？」

珍しいですとも！　という店員の声がみんなでハモる。すると先程の若い男の店員が代表して説明をしてくれた。

「この街にはブレイカーどころかモンスターと戦おうとする人が少なすぎるんです。だから武器屋や防具屋などモンスターと戦う人のための店にはまったくと言っていいほどお客が来ないのです。だからお客様は神様です！」

と最後は熱が入ってしまった店員だが、言いたいことはよく分かった。

「そうなんですか……何か大変ですね」

「はい……でも仕方がないんですよ。モンスターって危険ですからね。命を懸けて戦ってお金を稼ぐなんて人、普通いませんよね……」

（ここにいるんだが）

ちょっとムカッとなったキリヤだが、一般人からすればそれが当たり前の事なのだろう。モンスター相手だと下手をすれば死ぬことだってある。それはキリヤ自身が一番よく知っている。

「まあ、確かにモンスターは危険ですけど、コツさえ覚えればなんてことないですよ」

「それはそうですけど……きっとそれが難しいんですよ」

「いや、あの時の俺に出来たんだから誰だって出来ると思いますよ？」

「あの時って……どの時ですか？」

「俺が１０歳のとき」

「んなっ！？」

キリヤの話を聞いている全ての店員の動きが止まった。みんな見事に口がポカーンと開いている。

「ほ、本当ですか？」

店員が確かめるように聞いてくる。

「嘘なんてついても俺に得はありませんよ」

すると店員たちが小声で何か言い始めた。

マジかよ、なんて人だ、すごい、１０歳でそんな事してたのか？、じゃあどうする？　、やっぱこの人しかいないよな？　、そうだよな、ｅｔｃ

少しの間ザワザワと話していたが、なにやら話がまとまったようだ。先程の若い男の店員がキリヤのほうに向き直る。

「キリヤさん。僕たちは今のこの街の状態に不満を持っているんです」

「今の状態って？」

「この街の人がモンスターに脅(おび)えて街の外に出たくないと思っていることにです！」

「は、はあ」

「僕たちはみんな、出来ることなら外の世界というものを見てみたいと思っているんです」

（あぁ、そうか。この人たちも俺と同じなんだ）

キリヤは少し微笑んで言った。

「そう思うことは、良い事だと思いますよ？」

「しかしどんなに外の世界に出たくても、僕らだって他の人と同じようにモンスターは怖いです」

「そう……ですか……」

「だからキリヤさん」

「何ですか？」

すると全ての店員が見事に揃って土下座の形になった。

「俺たちを――」

「私たちを――」

『弟子にして下さい！』

「へ？」

予想外なことが起きた。全員見事に土下座と声がハモった――――のではなく弟子にしてくれと頼んできた。

「無理ですよ！　俺師匠なんかむいてないしそれに人数が多すぎます！」

キリヤは必死で断った。大体1週間後にもうこの街を出るのに弟子なんか取れる筈がない。

「そうですよね、まあ当たり前ですよね」

そんな顔をしないでくださいよ！　俺が悪いみたいじゃないですか！　とキリヤは思うのだが、この人たちの外の世界に出てみたいという夢を無残に潰したくはなかった。

「でも……」

キリヤの言葉に店員たちが顔を上げる。

「さすがに弟子は取れませんけど、俺が旅に出るまでの1週間で教えられることがあるなら手伝いますよ？」

すると暗い顔をしていた店員たちが一気に明るい顔になった。

「ホントですか！？」

「はい、本当です」

『ありがとうございます！』

またハモった。

店員たちは本当に嬉しそうだった。しかしそこでキリヤの中の悪魔が囁(ささや)いた。タダはいかんと。

「あのー、その代わりにここの防具ちょっとだけ値引きしてもらえませんか？」

キリヤは己の中の悪魔に負けた。

「いいですとも！　というかここにあるもの全て差し上げます」

「いやいやいや、そこまではいいです！」

店員はキリヤの中の悪魔に勝った。

「じゃあ時間が無いので早速明日から始めましょう。明日の朝９時に南門集合でいいですか？」

『はい！』

そういう訳でキリヤは晴れて防具屋の店員たちの師匠（仮）にな

った。

第7話　師匠（仮）（後書き）

旅に出る前の一仕事。

第8話　新装備

なんだかんだで防具屋の店員たちの師匠（仮）になるという貴重な体験をすることになったキリヤ。あと一週間、その期間で出来るだけのことはやろう、そうキリヤは心に決めた。

現在時間は午前8時45分。キリヤは街の南門で弟子（仮）を待機中だった。遅れちゃいかんという事で早めに来たが、ちょっと早すぎたか。そんなことを考えていると、街の方から昨日の店員（×8）がやって来た。みんな結構ラフな服装だった。

「おはようございます」

『おはようございます』

キリヤが挨拶すると店員（×8）も頭を下げて挨拶を返してきた。すると昨日の若い男の店員が代表して聞いてきた。

「あの……僕たち、武器も防具も持ってないのでこんな格好で来てしまったんですけど……大丈夫でしょうか？」

「大丈夫ですよ。今日はちょっと授業をやろうと思うので、服装は関係無いです」

「授業……ですか？」

「はい、まず皆さんにはモンスターについて学んでもらいます。モンスターというものが、一体どういうものかを知ってもらわないと危険ですからね。だからとりあえず今から俺が借りてる宿に来て

もらって、皆さんにはそれを学んでもらいます」

「キリヤさんの家に行けるんですか！？」

「まあ、借りてる宿ですけど……」

店員一同はなぜかワイワイキャッキャと言い出した。

（俺ってそんなに有名？）

そんな仕様もない事を考えているキリヤはとりあえず弟子（仮）たちを宿に連れて行くことにした。

キリヤの借りている宿は、別に新しいわけでもきれいなわけでもない至って普通な宿だが、９人の人間が中に入ったらはち切れる程狭いわけではない。キリヤは自分が借りている部屋に店員（×８）を招き入れた。

「まあ、あんまり広くないですけど楽にしてください」

そう言ってキリヤはベッドに腰掛けて振り向くと、驚いたことにそこにはきれいに横一列になって床の上で正座をしている店員（×８）の姿。

（なんて光景だこりゃ。店員が８人揃って正座してるよ）

どこをどうツッコめばいいか分からないからキリヤはとりあえず授業をスタートした。

「じゃあまず自己紹介からしましょうか」

「え？」

「だって俺、まだあなたたちの名前知りませんよ」

「そ、そうですよね」

「とりあえず名前と年齢を。まずあなたから」

そういうわけで若い男の店員から授業改め自己紹介がスタートした。

「僕の名前は――」

その後、８人の自己紹介は１０分ほどで終了した。要約すると男性陣は、最初に自己紹介を始めた男の店員からカイン、ニック、ローレン、フリードの４人。女性陣はカーラ、シェリー、アリス、ユウカの４人。全員キリヤより年上だったが、キリヤに対しては全員敬語だった。

「それじゃあ、自己紹介も終わったことだし改めて授業に入りましょう」

授業と言ってもキリヤが知っているモンスターに関する知識を教えるだけだった。キリヤが今まで戦ってきたモンスターの名前、種類、弱点、性質、見た目、スキル、強さなど知っている限りの全てを詳しく伝えた。８人はキリヤの話を真剣に聞いてくれていた。

「――と、まあ俺が知ってる事はこんなもんですかね。何か質問ある人？」

「はい」

カインが手を上げた。

「どうぞ」

「あの……キリヤさんみたいにブレイカーの称号を手に入れるには具体的に何をすればいいんですか？」

「う～ん……分かんないです」

「え？」

「俺がこれを手に入れた時はモンスターとの戦闘中でしたし……あ、もしかしたら何かきっかけが必要なのかも知れません」

「きっかけ……ですか？」

「はい。確か、俺があの時戦ってたモンスターがある理由でいきなり強くなっちゃって、俺死ぬ寸前だったんですよ。その時に『まだ死ねない』って強く思ったら右手が強く光って、無我夢中でモンスターを倒して、その後よく見たらこれがあったって感じです」

「そ、そうなんですか」

キリヤはフィストにブレイカーになる方法など聞いたことが無かったため、そうとしか言いようがなかった。

「じゃあ、他に質問がある人？」

今度は誰も手を上げなかった。現在時間は１２時を回っていた。

「じゃあ皆さん、午後時間ありますか？」

「え？」

「出来れば午後に皆さんの武器と防具を揃えておきたいんです。昨日も言った通り、俺はあと一週間でこの街を出ちゃうのであまり時間はありませんから、明日からはもうモンスターと戦ってみようと思うんです。だから今日中に武器と防具は揃えておきたいなぁ、と」

「そうなんですか。僕は空いてますけど……」

俺も、私も、僕も、という感じで全員午後は時間があるようだ。

「じゃあ午後の１時半にもう一度、南門前でいいですか？」

『はい』

というわけで午後は武器と防具を買いに行くことになった。

「じゃあ皆さんお疲れ様でした」

『お疲れ様でした』

一同はそう言って宿から出て行く。するとカインだけが足を止めた。

「キリヤさん、本当にありがとうございます」

「いいえ、いいんですよ。どうせ一週間後に旅に出るって言ったって、大してやることもなかったし」

そしてカインは最後に深く頭を下げて、仲間を追うように小走りで走っていった。

（あのチームのリーダーはカインさんだなぁ）

キリヤは小さくなっていくカインの背中を見ながら心の中で呟いた。

午後1時半

もう一度南門に集まった一同はまず武器屋に向かった。キリヤは武器屋にはちょっと嫌な思い出があるので、みんなが中で武器を選んでいる間は外で待機することにした。

武器を買い終わったカインたちはそれぞれ買った武器を持ち、店から出てきた。

「じゃ、次は防具屋ですね」

キリヤは言うとカインが言った。

「僕たちが働いてる防具屋は今日は休みにしていて表の入り口は開いてないんです。だから裏口から入りましょう」

そう言ってカインは歩き出した。キリヤは裏口という言葉にちょっとワクワクしながら着いて行く。

防具屋に着くと、一同は裏口に回るために防具屋とその隣の建物の間の細い路地を歩いていく。実はこうやって、『開いてない店』の裏口から店に入るのがキリヤの小さな夢だった。
カインは合鍵を使って裏口を開いた。そして一同が店の中に入っていく。その光景を見てキリヤはふと疑問に思った。

「カインさん、こんな事していいんですか？」

「こんな事ってどんな事ですか？」

「いや、こんな……まるで泥棒みたいな事ですよ。いくらこの店の店員でも、店長とかに怒られないんですか？」

それを聞いた店員たちはお互いに目を合わせ、笑い出した。

「そうですよね。まだキリヤさんには言ってませんでしたね」

「？」

「実はこの店の店長、僕なんですよ」

「――――――え？」

「だから、僕がこの店の店長なんです」

「マジですか？」

「マジです」

驚くことにキリヤが今の今まで店員だと思っていたカインという

男は実は“店長”だった。キリヤが驚きを隠せない顔をしていると後ろの店員たちが口を開いた。

「驚きました？　こんな奴でも店長ですよ？　店長」

そう言ったのはカーラだった。

「俺もこの店に入ってすぐには信じられませんでしたよ。この人が店長だとは」

ローレンも続く。

「はっきり言って私はまだ信じられませんよ、この人が店長だって」

最後はユウカが決めた。

「ちょっと待てお前ら！　僕だってやる時はやるんだぞ！　ていうか僕は店長だしそれ以前にお前らより年上なんだから敬語使えって何回言ったら分かるんだよ！」

店員改め店長のカインはちょっと涙目だった。

まあまあ落ち着けってカイン、だとか、いいじゃないのいいじゃないの、だとか、まったく敬語じゃない言葉で慰(なぐさ)められているカインが少し可哀想だった。しかし仲間たちと笑い合うという経験をあまりしたことが無かったキリヤにとって、なんだかその光景は微笑ましかった。

その後とりあえず落ち着いたカインがキリヤに言った。

「まあそんなわけで何でも好きなの選んでくれて構いませんよ。

全部無料で差し上げます。店長の権限で」

「ホントですか！？」

「このくらいじゃキリヤさんから受けた恩は返せないですけど、遠慮せずにどうぞ」

「ありがとうございます！」

キリヤは深く礼をして防具を選びに行った。

キリヤは動きやすさを重視して、所々に白い線が刺繍（ししゅう）されていて襟元（えりもと）から膝元（ひざもと）までである長めの黒いレザーコート、紺色のジーンズ、手の紋章を隠すために指出しの黒い皮手袋、という軽装備にした。実はキリヤの装備は全て防御力が高いモンスターの皮で作られいているため、見た目によらず防御力は結構高い。他の8人はというと、キリヤとは真逆の、素早さより防御力重視ということでチェインメイル全身フル装備のようだ。

「とりあえず揃える物は揃えましたし、今日はここまでにしますか」

キリヤが言うと8人は頷いた。

「それじゃあ明日、今度はアリエスタ集会所で午前9時に集合でいいですか？」

『はい！』

「では、今日は本当にお疲れ様でした」

最後にそう言ってキリヤは新しい装備に身を包み、裏口から出た

――――本当にその言葉が“最後”になるとは知らずに。

第8話　新装備（後書き）

また書いてたら止まんなくなっちゃって一日中書いてました。

第9話　彼らの行方

翌日

キリヤは約束通り午前9時に集会所に着いた。８人の姿は見当たらない。すぐ来るだろうと思い待つことにした。

しかし１０分後、３０分後、１時間後と時間が過ぎても一向(いっこう)に８人が来る気配が無い。キリヤは念のため受付係りのグランに、自分より前に8人組の男女が来ていないか確かめたが、どうやら集会所を開いて一番最初に来たのがキリヤらしい。

（もしかしたら場所とか時間を間違えてんのかなぁ）

しかし8人は1日目の集合場所と集合時間は間違えずにちゃんと南門に来てくれた。今日に限って8人全員が間違えたとは考えにくい。とりあえずキリヤは防具屋へ向かうために集会所を出た。

防具屋に着いたが、入り口には昨日と同じように『本日はお休みさせていただきます』という札が掛けてあった。彼らは集会所に来ていない、防具屋にもいない、ならば一体何処(どこ)にいるのだろうか。

表の入り口が開いてなかったのでキリヤは裏口に向かうことにした。昨日と同じようにキリヤは暗い路地へ入る。昨日と同じ路地なのに、1人でいるせいか不気味(ぶきみ)に思えてしまう。

キリヤは裏口へ着いた。昨日とまったく変わらないドアの前に立ち、ドアノブに手を掛けて回すと――開いていた。おかしい、店長であるカインが鍵を掛け忘れているなんて。

キリヤは恐る恐る店の中へ入った。するとどういうことか、店内は電気が点いていた。たとえ百歩譲ってカインが裏口の鍵を掛け忘れたとしよう。だが電気が点いているのに気付かずに店を出ること

はありえない。
キリヤの頭に不安がよぎる。まさか昨日キリヤがこの防具屋を出た後に何かが起きたのか――いや、何も起きていない筈だ。きっとキリヤが帰った後に急な用事か何かができてしまって、キリヤに伝える時間が無かったのだ。そして今はその用事を済ませるために、どこかへ行っているんだ。そう思いたい、そう思いたいのだが、もし仮に彼らが何か事件に巻き込まれていたら、全てはキリヤの責任だ。昨日真っ先に帰った自分が悪い。
キリヤはその後、店を出て8人を探すために街中を走り回ったが何処(どこ)を探しても見つからなかった。気付けば日が暮れていたため、キリヤは宿に帰った。
次の日もそのまた次の日も、キリヤは街中を探し回った。しかしどれだけ探しても8人の行方は分からなかった。
たとえ何か用事があったとしても3日間も顔を合わせないのはおかしい。やはりその場合は、何か事件に関わっていると考えたほうが妥当(だとう)だ。1人も姿を現さないところを見ると、8人全員が事件に関わっていると言っていいだろう。しかし事件に巻き込まれているとしたら一体何に？　8人全員が消えているとなれば誘拐の可能性は薄いだろう。8人を一気に誘拐するなんて事は可能性としてはゼロではないがあまり考えにくい。ならばその場合もしかしたら、信じたくはないがもしかしたら――――死

（やめろ、考えるな！！）

キリヤは一瞬でも最悪の事態を考えてしまった自分の思考を無理やり止めた。
だめだ、それだけは絶対にだめだ。きっとこれには何か理由があるはずだ。
キリヤが街を歩きながら頭をフルで回転させていると、あの防具屋に辿り着いた。そこでキリヤは足を止める。

（もしかしたら何か見落としている事があるかもしれない）

キリヤはそう思い、もう一度裏口から店内に入った。店内は相変わらず電気が点けっぱなしだった。

キリヤは手当たり次第に手がかりになりそうなものを探した。店内の全ての防具、テーブルの下、関係者以外立ち入り禁止場所。しかし何処を探しても手がかりになるような物は何一つ見つからなかった。

（だめか）

キリヤが諦めて帰ろうとドアに向かったその時、床に置いてあるダンボールとダンボールの間に何か光る物が見えた。近くに寄ってよく見てみると、それは黒い石だった。綺麗（きれい）な立方体の形をしている手のひらサイズの小さな石。キリヤはそれを左手で拾い上げた。するとそれと同時に、キリヤの左手と石が淡く黒い光を放った。色は違えどそれは、キリヤが『戦士（ブレイカー）』の称号を手に入れた時に右手から放たれた光に似ていた。

キリヤが呆然と石を眺めていると、何処からか男の声が聞こえた。

『何だ』

低く平坦な声だった。

キリヤは辺りを見渡したが店の中には自分の他に誰もいない。

『何だと聞いている』

そしてキリヤは気付いた。その男の声は石の中から発せられていた。キリヤは何か喋ろうと思ったが咄嗟に言葉が出てこない。

「いや……あの……えっと……」

『用がないんなら、お前もそんなところにいないで早く帰って来い』

どうやらこの石は通信機、そして発信機の役割があり、キリヤの居場所は知られているらしい。そしてこの男はキリヤのことを仲間かなんかと勘違いしているらしい。これは有力な手がかりだ。もしかしたら8人の居場所が分かるかも知れない。ならばこのチャンスを見逃すわけにはいかない。聞けることは全部聞いてやる。そう思い、キリヤは口を開いた。

「帰るって何処に？」

（しまった！　この質問は直球すぎた。これじゃ怪しまれる）

『どこって……その街の北にあるグリーグスに決まってるだろうが』

どうやら向こうの男も馬鹿だったようだ。街の名前だけでなく場所まで教えてくれた。

キリヤはこの男の馬鹿を信じてもう一度、玉砕覚悟で直球勝負に出た。

「一昨昨日（さきおとといこここで消えた8人組の男女を知らないか？」

『お前ボケたか？　そいつらはお前らの班が生け捕りにしてここグリーグスに持って来ただろうが』

今全ての謎が解けた。彼らはあの日、キリヤが店を出た後にこの店で、この男が言う『班』に襲われた。そしてグリーグスに連れて行かれた。この男は『生け捕り』と言った。ならば彼らは今もグリーグスで生きている筈だ。それが分かれば今キリヤがするべき事はたった一つ。

『おい、お前どうした？　さっきから変な事ばっか言いやがって。それにお前の班はこの街に戻って来てる筈だろ？　なんで今更そんな所から連絡なんか……待てよ……まさか――――！』

バリンッ！　という音と共にキリヤが地面に投げつけた通信石は粉々に砕け散った。キリヤは、見事に最後の最後まで馬鹿だった男に感謝した。おかげで彼らが今いる場所と、彼らがまだ生きていることを確認できた。

（よし、カインさんたちは生きてる。でも捕まってるとなると……助け出すのは俺の役目だな）

キリヤは勢い良く裏口から外へ出た。

第9話　彼らの行方（後書き）

今回もちょっと短め。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9348z/

俺たちの物語

2012年1月12日18時53分発行